

## 「分析アジア哲学 台湾派遣報告書」

京都大学文学研究科 博士一回 青木眞澄

ここでは、2019年3月18日から3月25日にかけて行われた台湾派遣について、簡潔に報告する。本プログラムは、①国立政治大学における学術交流イベント”Selfhood, Otherness, and Cultivation: Phenomenology and Chinese Philosophy International Conference”、②東海大学における学術交流イベント”Tung Hai - Kyoto University Graduate Exchange Workshop in Philosophy 2019”、③国立台湾大学におけるワークショップ”2nd Joint Workshop of NTU-Kyoto on “Self and Subjectivity: from Multi-cultural and Interdisciplinary Perspectives””、および④国立台湾大学における学術交流イベント”Kyoto-NTU Philosophy Colloquium of Graduate Students: Self, Subjectivity and Consciousness”に参加するものであった。ただし、報告者は日程の都合により、3月22日夜に台湾入りし、3月23日開催の④のみに参加した。こちらの都合に合わせて個別に航空券等を工面してくださったKUASUにはこの場を借りて感謝申し上げたい。以下では、上記④について、プログラム内容、学習成果、海外での経験、進路への影響という観点から報告する。

## ○プログラム内容

予てより本プログラムを通じて交流のある国立台湾大学哲学系と本学文学研究科哲学専修との共催で、双方の大学院生以上の学生が個人研究発表を行うワークショップが、3月23日に国立台湾大学にて開催された。このワークショップは「自我、主体性、意識」をテーマとするものであり、質疑応答を含め一人45分の発表枠が与えられ、報告者も“Public Interest and Others in Hume’s Moral Theory”と題する発表を行った。このワークショップでは、台湾大学側で予め全発表者の発表原稿が取りまとめられた論文集を作成していただいた。また、国立台湾大学哲学系の佐藤将之教授の“The Origin of Chinese Philosophy in Modern Japan and East-Asia”と題する基調講演が行われた。我々と同様の分野を研究する大学院生との交流を深め、本プログラムの永続的な発展に寄与することができた。

## ○学習成果

大学院生にとって貴重な海外発表の経験を重ねることができた。発表では言語の壁に苦心しながらも、回数を重ねるごとに、内容面、方法面双方において成長することができたと実感している。また、現地の先生方、学生の方々から非常に多面的でクリティカルな質問、コメントを多く頂き、今後の研究にとって大きな前進となった。特に、コメンテーターの方が自分の論文を非常に綿密に検討して下さり、今後の研究に大きな示唆を与えてくださった。コメンテーターの仕組みは台湾の学会発表においては一般的であり、発表者のプレゼンテーションの後にコメンテーターが予め準備して本格的なコメントを行うことになっている。この仕組みは限られた時間内で内容の濃い議論を可能とするものであるため、今後このような機会があれば、積極的に取り組みたい。また、佐藤教授の講演や台湾大学側の学生の発表は、東洋思想と西洋思想とを結ぶグローバルな視点に富むものであった。日本では伝統的に西洋哲学研究が盛んなので、このような視点からの研究が魅力的であることを知ることができたことは、大きな収穫であった。

## ○海外での経験

上記のプログラムは全て英語で行われたため、英語の読む、聞く、書く等の諸能力が上達した。上記プログラム以外でも、現地の先生方、学生の方々との交流等を通じて、語学の諸能力が上達した。また、こちらの学生に比べ、現地の学生の方々が積極的に発言されている様から刺激を受けた。こちらには言語の壁があるとはいえ、より積極的な参加姿勢が必要だと感じた。報告者の発表では、メモを手放せず、フロア側に目を向ける余裕がなかった点が課題として残った。また、報告者が想定していたよりもプレゼンテーションに時間がかかってしまい、最後の方がかなり急ぎ足になってしまった。これらの点に関しては、より周到に準備をしていれば、精神的余裕を持って時間内に発表でき、フロアを引き込ませられるような工夫もできていたであろうと反省している。このような機会があれば次回も参加し、この反省を生かせるようにした。また、報告者は質疑応答において質問に的確に答えることに大変苦心したので、今後の課題としたい。

## ○進路への影響

報告者本学博士課程に在籍している。博士課程在籍中に海外への長期留学を視野に入れており、本プログラムでの経験はこうした留学計画に役立つと考えている。伝統的には日本で研究者を目指す学生はヨーロッパやアメリカへ長期留学することが多かったが、今後は留学の候補地の視野をアジアなどに広げるべきだと考えるようになった。